3. まとめ

3-1 第１分科会 「秋田の地図をつくる」まとめ

担当 石井宏一

分科会テーマ	秋田の地図をつくる（街の中に潜在している「情報」を通じて、秋田はどのような都市なのかを考えてみよう）
担当者・メンバー	担当者　石井宏一 メンバー（6 名）　近藤芽未　中村ふみ　鎌田佳佑　鈴木湧平 小松佳世　三上翼
活動の内容	秋田の街のなかに存在する情報をもとに「地図をつくる」ことを通じて、「秋田の都市としての特徴」を歴史的背景な背景などから明らかにし、考察していく。
活動のプロセス	「地図」をつくり、「秋田の都市としての特徴」を考察するために、実際に秋田の街を散策した。そして、今回は 2 つのグループに分かれて活動を行った。 一つ目のグループは、秋田駅西口から南大通、広小路を散策し、その時に仲小路には小規模の面白い店が多く、歩いていて楽しいと思い、仲小路について調査を始めた。実際に仲小路の商店街の人に聞き込みをすると、ここ 5 年の間に店が入れ替わっていて、活気付いていることが分かった。そこで、最近仲小路に何があったか疑問に思い、仲小路の歴史に詳しいという食器の「さかいだ」の社長にインタビューをした。昔、仲小路の周辺は闇市になっていたが、西武などの大きい店舗ができたことで街が整理されていき、さらに、日赤病院ができたことで、商店街に活気が出てきたそうだ。しかし、13 年前に日赤病院が移転したことで、仲小路の人通りが少なくなり、店も減ってしまったのである。そこで、商店街の人たちは「女性の会」を立ち上げ、商店街内にある明徳館高校と連携したイベントを主催し、活気を取り戻そうとしている。また、13 年前に街を賑わせた日赤病院跡地には、現在、県立美術館や秋田にぎわい交流館が建築中であり、これらの施設ができることによって、日赤病院があった当時の時のように、商店街を訪れる人の量もまた変化していくと考えた。このように、仲小路は一度、衰退したけれど、街の人の努力によって再び活気を取り戻そうとしているため、面白い街だということが分かった。 二つ目のグループは、秋田駅東口から東通付近を散策した。散策をしてみると、古い建物が少なく、比較的新しい建物が多いこと、学校園が密集していることに気が付いた。そこで、なぜ、学校園が密集しているのか、秋田駅西口側・秋大付近に比べて新しい建物が多

	いのかについて、文献を参考にしながら深く掘り下げてみた。東通付近は、昭和 39 年、一面田んぼであった。昭和 52 年に商店が増え、住宅街となり、それに伴い人口が激増した。その後、次々と学校が開校し、また秋田駅東口前広場が完成したり、秋田中央道路が供用開始したりと街が整備されていった。また、街と学校の関係であるが、学校園は周辺の人口が増加し、住宅街となってからできてくるものである。西口側と東口側の学校の開校年を比較してみても、西口側の学校が明治頃であるのに対して、東口側は昭和の後半頃に開校したものが多かった。このことから、東口側は比較的新しい街であることが分かった。
まとめ	「地図をつくる」ことを通して、まず仲小路は 13 年前の日赤病院の移転によって、一度衰退したけれど、街の人たちの努力により再び活気を取り戻そうとしているため、面白い街だということが分かった。一方、東口側は、最近になり秋田中央道路ができたり、多くの学校園ができたりと比較的新しい街だということが分かった。このようなことから、秋田という都市は、様々なところにそれぞれの魅力があると考察した。

3-2 第 2 分科会「教材としての『FIFA ワールドカップ南アフリカ大会』」まとめ

担当 伊藤恵造

分科会テーマ	教材としての「FIFA ワールドカップ南アフリカ大会」
担当者・メンバー	担 当 者：伊藤恵造 メンバー：阿部大紀、安倍政輝、五十嵐翔吾、石川達基、大木陽平、大平敦史、菊池雄太、齊藤　愛、武田隼人、藤木雄也、米澤　紳、朝倉龍太郎、伊岡森真由、老山友理、進藤夏美、藤井恵理、神戸智広、白取大輔、西岡　塁（１９名）
活動の概要	日本国内のみならず世界中の人々を「熱狂」させた「FIFA ワールドカップ南アフリカ大会」を教材として取り上げ、文化、歴史、経済、環境、人種差別、地域間格差など、さまざまなテーマについてグループワークを通して学習しました。最終的には、体験した学習活動を踏まえて、独自の学習プログラムを作成し、それを実際に行ないました。
活動のプロセス	全９回の分科会活動の前半４回は、各メンバーが受講者となって学習プログラムを体験しました。初回の授業時には「自己紹介用シート」を活用した自己紹介や、カラーシールを使って人種差別について考えるアイスブレイクのプログラムを行ないました。 2 回目以降は、特定非営利活動法人開発教育協会が作成した「FIFA ワールドカップ南アフリカ大会」に関する教材を活用し、学習会を進めていきました。具体的には、(1) 2010FIFA ワールドカップ参加国の国旗当てゲーム、(2) 数字で見るワールドカップ参加国（出場 32 カ国あれこれランキング)、(3) 私たちの日本代表チームをつくろう、の 3 つのプログラムを体験しました。 5 回目以降は、体験したプログラムをヒントにして、4 つのグループに分かれてそれぞれプログラムを作成することにしました。結果的に、1 班：日本をワールドカップ開催国にするために、2 班：ワールドカップ上位入賞国のお国事情、3 班：みんなが楽しめるワールドカップ、4 班：ワールドカップがもたらす経済効果、というタイトルのプログラムが発表されました。発表後には、(1) テーマとの関連性、(2) 内容、(3) 方法、(4) 対象に合っているか、(5) 独創性の 5 つの観点からお互いに採点を行ない、優秀発表を選定しました。
まとめ	最後は、優秀発表に選ばれた 4 班を中心に、役割分担をしながら全体会の発表準備に取り掛かりました。まとめとして、子どもたちを含めた多くの人たちが関心をもっているワールドカップの教材としての特徴を活用することの大切さが確認されました。

3-3 第 3 分科会「遊んで学べるすごろくを作ろう！！」まとめ

担当 井門正美

分科会テーマ	第 3 分科会　遊んで学べるすごろくを作ろう！！
担当者・メンバー	担当者　井門正美 安西毬恵　井川武宗　石井孟明　加賀谷慶之　児玉祐佳　佐藤綾香 佐藤朋子　高橋苑子　田島駿己　本間隆造　湯瀬瞳　田中理恵 川村さやか　斉藤裕介　竹田健太朗　千葉和輝　中川翔平　古内美帆 湊智雅　滝原香苗　下田友紀　安田かおり
活動の目的	すごろくは『日本書紀』の中に、の６８９年（持統天皇の代）に「禁断双六」という記述があるということですが、これは盤双六と言われるものです。今回、私たちが対象としたのは、皆さんにもお馴染みの絵すごろくです。この絵すごろくの源流は、13 世紀頃の仏法双六だと言われ、これは天台宗の新米のお坊さんに遊びながら仏法の名目を学ばせるために考案されたと推測されます。その後、江戸時代に入り、絵すごろくが成立するに至って、今日まで親しまれている遊びです。 　私たちは絵すごろくの「遊び」と「学び」に注目して、オリジナルな絵すごろく開発をすることにしました。 　絵すごろくには、「遊び」と「学び」が満載です！！
活動の概要	１．すごろく作りのポイント (1)テーマを決める。 　　地理、歴史、政治、社会、人物など (2)コース形式を決める。 　　①「ふりだし」と「上がり」の位置 　　②コースの型（渦巻き状＜円型、角型＞、蛇行状、捻り状等） (3)マスの数を決める。 　　①マスをいくつにするか 　　②絵をいくつ設定するか (4)駒を作る 　　①駒の数 　　②駒の絵　　＊テーマに関連した駒 　　③駒の形 (5)ゲーム性と学習機能を組み込む 　　①マスごとに指示・条件を設定する（一回休み、振出しに戻るなど） 　　②どんな学びをさせるのか、学びの機能を設定する 　　③面白さと楽しさを組み込む (6)表現や芸術性を組み込む 　　①絵柄、画材などの工夫 　　②アイディア、美しさ、新奇性など

	(7)サイコロ等の設定 ①サイコロ、ルーレットなどの設定 ②さいの目の数、ルーレットの数字の数 ２．私たちが作ったオリジナルすごろく　＊詳細はスライド参照 (1)童話すごろく（人環女子チーム） (2)目指せエコマスターすごろく（あんころもちチーム） (3)東北＆北海道Ｂ級グルメすごろく（チーム・スティッチ） (4)江戸時代すごろく（チーム歴女☆） (5)三国志すごろく（教科教育+αチーム） (6)歴代内閣総理大臣すごろく　（社教研男子チーム） (7)すごろく「総理大臣になろう！」（地域科学チーム） (8)世界の通貨すごろく（ｔｅａｍ　TKB）
まとめ	すごろくは、遊びと学びのハーモニーです。子どもから大人まで、みんなで、遊んで、楽しんで、学ぶことのできる伝統的なゲームです。 作る立場からも、歴史や現実を題材にしたり、夢や想像をモチーフにしたり、理想世界を築いたりと、世界を創造する楽しみを味わうことができます。 みなさんも、すごろく作りに挑戦してみませんか。

3-4 第４分科会「環境と食品の安全化学」まとめ

担当 岩田吉弘

分科会テーマ	環境と食品の安全化学
担当者・メンバー	担当者　岩田吉弘　メンバー(６名) 井上央務、堅田真守、北澤宏明、後藤優弥、佐藤治人、高橋理一郎
活動の概要	各自が環境と食品に関する話題を取り上げ、安全と化学の立場から調査、研究した。さらに中学校における総合学習としての立場から、調べ学習への動機付けと学習者が身につける力について考察した。以上の内容を取りまとめ、活動報告をおこなった。
活動のプロセス	１)各自がもっている環境と食品への関心事を大枠として集約した結果、農薬、環境中の有害化学物質、食品添加物、ダイエットがキーワードとしてあがった。各自の関心事が多岐にわたっており、分科会として１テーマにまとめるのではなく、各自が調査研究することとした。 ２）キーワードをもとに、調査・研究でターゲットとして扱う事象、物質を絞り込む作業を行った。その結果、農薬のリスクとベネフィット、有機農法の功罪、ダイオキシンの毒性評価、食品添加物の正しい理解、摂取カロリーと合成甘味料、栄養素の適切な摂取をターゲットとすることとした。 ４）総合学習に即し、生徒がターゲットに対してどのような動機付けをおこなえば関心を持つか議論した。 ５）各自が、それぞれのターゲットに対する調査・研究の項目をリストし，その中から実際に調査する項目を選定した。 ６）選定した項目に対し、成書、新聞記事、論文等のトレース可能な情報源をもとに情報収集、解析、評価を行った。 ７）総合学習に即し，一連の調査・研究活動で生徒に身につく力について議論した。 ８）各自の調査・研究内容の概略を取りまとめ、２月３日に活動報告をおこなった。 テーマおよび担当者 食品添加物を知ろう　井上央務 有機農法の安全性　堅田真守 糖分と合成甘味料　北澤宏明 ダイオキシンの今と昔　後藤優弥 農薬に対する理解を深めよう　佐藤治人 特定栄養素の過不足による人体への影響　高橋理一郎
まとめ	分科会独自に、各自の調査・研究の詳細な内容に関する報告会をおこなう予定である

3-5 第 5 分科会「グローバリゼーション時代の秋大生の衣食」まとめ

担当 内田昌功

分科会テーマ	グローバリゼーション時代の秋大生の衣食
担当者・メンバー	担当者　内田昌功 メンバー(12 名) 宇佐美貴章、髙橋真理、秋山なつみ、木村汐里、佐藤圭、佐藤宏美、菅原南、園田えみ、戸ヶ瀬玲奈、奈良恵里香、松本翔、武蔵幸花
活動の概要	衣服や食というごく日常的なものを材料として、現代社会を特徴付けるグローバリゼーションの動きを確認し、理解を深めることにしました。普段着ている服や食べているものがどこで作られたものか調査し、統計を取って、グローバリゼーションの中にある私たちの生活を浮かび上がらせました。
活動のプロセス	現代はグローバリゼーションの時代と言われています。政治や経済や文化は国境を越えて展開し、私たちの生活はもはや世界の動きと無関係ではありえません。しかし一方で私たちは日常、グローバリゼーションについて深く考え、意識することは多くはありません。そこで食事や衣服というごく身近な生活の側面に注目し、グローバリゼーションの実態について調べてみることにしました。 授業ではまずグローバリゼーションの概念と仕組みについて学びました。またグローバリゼーションの歴史、なぜ近年グローバリゼーションが急拡大しているのか、秋田の人口流出とグローバリゼーションの関係などについて勉強しました。 グローバリゼーションについて基礎知識を身につけた上で、次に衣服と食事の調査を行いました。衣服については学生本人と友人の所有する衣服について調べ、1000 件近い統計を取りました。食事については、各自が 2 週間にわたり消費した食材の原産国を調べ、統計を取りました。 その結果、衣服の実に 99%が中国をはじめとするアジアで生産されていること、食事においては意外と国産比率が高いことなどの事実が浮かび上がりました。また食材の中では魚介類の海外産比率が高いことがわかりました。日本の伝統的な食文化ともいえる魚を食する文化が、グローバリゼーションによって支えられていることは新鮮な発見でした。 最後に以上の調査をふまえて、今後の私たちの生活とグローバリゼーションについて議論を行い、理解を深めました。肯定的な意見がある一方、否定的な意見も多く、結論はまとまりませんでした。グローバリゼーションが生活と密接に、かつ複雑に関わっており、単純にはとらえきれないことは理解できました。これを機会に今後もグローバリゼーションいついて考えて生きたいと思います。

まとめ	衣服の多くが海外で作られていることはある程度想像がつきましたが、90%以上という数字にはあらためて驚かされました。実際に数字を出してみると、「グローバリゼーションの時代」という言い方もけっして誇張ではないということがわかりました。一方で、魚介を食べるという日本の食文化の特徴がグローバリゼーションによって支えられているという結果からは、グローバリゼーションの別の側面を知ることができました。グローバリゼーションは文化をボーダレスにするとともに、地域的な文化を支え、さらに際立てる作用もあるのです。 また生産拠点の中国への移動という流れが、最近は中国から他のアジアへ移動し始めていることもわかりました。グローバリゼーションは思っていた以上に複雑で、多様で、動きがあるということがわかります。 グローバリゼーションは、現代社会を理解する上で、またこれからの時代を見通す上で欠かせない視点です。ささやかな学習と調査ではありましたが、グローバリゼーションを理解するための入り口には立つことはできたと思います。

3-6 第 6 分科会「宇宙教育（プラネタリウム番組制作体験）」まとめ

報告書 担当 川村教一

分科会テーマ	宇宙教育（プラネタリウム番組制作体験）
担当者・メンバー	担当者　川村教一 メンバー(４名) 阿部秀人、岩田英士、菊地奈々美、和田俊祐
活動の概要	児童の宇宙への興味・関心を高める学習活動のひとつとして、プラネタリウムを用いて行う教育プログラム作りに取り組む。番組つくりを通して、教育素材収集、教材の構成、プラネタリウム投影機の構造と機能についての知識や理解を深める。
活動のプロセス	第１回　イントロダクション：分科会の趣旨説明を聞くとともに、参加者各自が取り組みたいことについて意見交換を行った。その結果、活動テーマは児童向けのプラネタリウム番組を制作することとなった。 第２回　プラネタリウム番組テーマの検討：プラネタリウム投影機の構造と機能について、調べてくることが宿題のテーマとして出された。 第３回　プラネタリウム番組の構成案の検討：プラネタリウム番組企画書（テーマ「宇宙人に会いに行こう!」）を作成し、取り上げる天体を太陽系に設定した．また、プラネタリウム投影機の構造と機能について各自が調べてきた内容をまとめ、情報を共有した。宇宙空間や天体について理解を深めるため、これらについて調べてくることが宿題のテーマとして出された。 第４回　プラネタリウム見学：秋田県児童会館を会場に、投影機の構造と機能について同会館職員から解説を聞いた。見学内容についてはレポートにまとめた。 第５回　プラネタリウム番組の構成案の検討：番組の構成、キャラクターデザイン、ストーリー案を検討した。 第６回　プラネタリウム番組台本の検討（１）：ストーリーに加え、絵コンテを検討した。特に、番組で使用する画像素材を分担して収集したものを検討し、選定した。また、高校放送部経験者の学生から、番組制作上の工夫や注意点などのアドバイスを聞いた。 第７回　プラネタリウム番組台本の検討（２）：番組における画像提示は、パワーポイントのスライドショーを基本とした。前回選定した画像をスライドショーに編集し、ストーリーとの整合性や見やすさについて検討した。台詞台本は各自が分担して執筆したものを持ち寄り、検討結果をもとに改善点を洗い出した。台本の改訂は各自分担しての宿題とした。 第８回　台本読み合わせ（１）：台本をほぼ完成させた。スライドショーを見ながら台詞を読み上げて、スライドショーのアニメーションや台詞内容の問題点を抽出・検討した。ボランティアの聴衆から、番組改善点について、番組タイトル、スライドショーの構成、アニメーション、台

	詞の読み方、BGM あるいは音響効果の導入についてのアドバイスを聞いた。また、関係図書・視聴覚教材の紹介があった。 第９回　台本読み合わせ（２）：スライドショーをほぼ完成させた。BGM を流しながらスライドショーを行い、台詞を読み上げる練習を行うと同時に、台詞の微修正を行った。スライドショーのアニメーションや台詞の改善点をなお検討した。 その他自主活動：授業時間外に学生が学内や学外のプラネタリウム（秋田県児童会館）に集まり、台本読み合わせなどに取り組み、作品の完成度を向上させた。
まとめ	本分科会では、秋田県児童会館プラネタリウムで上映できる児童向けの学習番組を作成した。番組はパワーポイントのスライドショー、ナレーション、BGM 演奏を併用したマニュアル形式のもので、主要な太陽系天体の特徴について知識を深めさせるとともに、児童の宇宙への興味や関心を高めることをねらいとした。

3-7 第７分科会「障がい者の地域生活～余暇支援を通して～」まとめ

担当　今野和夫

分科会のテーマ	障がい者の地域生活 ～余暇支援を通して～
担当者・メンバー	担当者　今野和夫 メンバー（１５名） 葛西一馬　藤田夏喜　高橋里奈　冨永舞　吉原綾乃　石井理奈 福田孝太朗　藤谷和樹　百崎千　児玉佳一　池端環奈 加賀谷葵　大川真美　星祥子　上石茜音
活動の概要	障がいのある方たちは、地域で生きがいのある生活を送るには、自由に参加できる余暇活動の充実が不可欠です。しかし、障がいのある方には移動の困難や活動内容の困難さからこうした活動に積極的に参加できないというのも現状です。 このような方々が地域の中で充実した余暇活動をできるように支援しているボランティア団体が多くあります。こうしたボランティア団体を訪問し、実際に活動を見学体験したり、関係者の方たちにインタビューをしたりして、余暇支援について学びました。
活動のプロセス	私たちは、障がいのある方々の地域生活を考える上で、余暇活動と余暇支援に注目しました。 まず、障害のある方々が余暇活動をする上での、様々な困難を知ることから始めました。 そして、そういった方々が安心して、楽しく余暇活動ができるように支援しているボランティア団体をいくつか調べました。 その後、そのボランティア団体を見学、体験しました。また、関係者からのインタビューも行い、それらを元に、障がいのある方の余暇活動の現状や、課題を考えました。
まとめ	この分科会では、障がい者の地域生活について、余暇活動という視点から考えることで、ボランティア団体や、支援している人たちの存在を知ることができました。しかし、まだまだ、障がいのある方が、余暇活動をするには様々な困難がある現状も見えてきました。今回、学んだことをきっかけとして、余暇支援がどういうものであればよいのか、現状を打開するにはどうしたらよいのかを各々考えていきたいと思います。

3-8 第 8 分科会「童謡の研究」まとめ

担当 斎藤洋

分科会テーマ	童謡の研究
担当者・メンバー	担当者　斎藤洋 メンバー（12 名）大和田諭子、小松さな恵、袴田枝里、村山友里、森山美里、川住知佳、瀬谷美由希、小林沙生、佐竹佳奈、佐藤大輝、鈴木千尋
活動の概要	童謡の歌詞に込められた真のメッセージを探り、さらには実際に歌うことにより、童謡への関心を深めた。歌詞の意味と解釈、詞とメロディーとの関係、曲の成立背景などについて文献、映像資料等をもとに多角的に研究した。
活動のプロセス	研究の方法 ○１人１曲、童謡の歌詞に隠された謎について調べた。 ○グループごとに以下のテーマについて研究した。 １．遊び歌　様々な遊び歌を系統的に分類し、その歴史について研究した。数曲を取り上げ、実践した。 ２．秋田の童謡　秋田出身の作曲家について、その生涯と作品を研究し、数曲を取り上げ、実際に歌った。 ３．マザーグース　イギリスの童謡であるマザーグースについて研究し、その特徴、日本の童謡との違いについて考察した。 ４．ランキング　童謡が多く作られた年代や、現在でも歌われている曲が多い作詞家・作曲家などのランキングづけした。 ○現地調査として、分担して浜辺の歌音楽館、「どじょっこふなっこ」の発祥の地である金足西小学校、インフォメーションセンターで開催された童謡のコンサートに行った。 ○秋田ゆかりの童謡、「どじょっこふなっこ」の合唱をした。 ○各研究結果をもとに、童謡の役割とこれからについて考えた。
まとめ	昔から歌い継がれてきた童謡が、次第に姿を消してきている。しかし、忘れかけていた多くの童謡を歌い、研究を深めていくうちに童謡の魅力を再発見した。作者の童謡に対する情熱、詞やメロディーの奥深さに触れ、こんなにすばらしい童謡が消えてしまうのはあまりにも寂しく、これからも歌い継がれていくべきだと考えるようになった。 童謡には、異なる世代をつなげる、そして親と子の愛着を形成する役割がある。歌っていて心地よく、やさしい気持ちになれるものである。 地域や世代間の交流が減り、親による幼児・児童虐待が社会問題になっている現代社会において、童謡の果たす大きいのではないだろうか。その意味でも童謡を私たちは絶やしてはいけないと思う。

3-9　第 9 分科会「秋田のイネ新品種『ゆめおばこ』誕生物語」まとめ

担当　寺井謙次

分科会テーマ	秋田のイネ新品種「ゆめおばこ」誕生物語
担当者・メンバー	担当者　寺井謙次 メンバー（６名）　宇佐美隆章　加藤武志　佐藤隆亮 七尾佑二郎　佐藤弘理　吉野 想
活動の概要	今年度から本格栽培が始まった、秋田で育成されたイネ新品種「ゆめおばこ」に注目し、育成の背景や誕生の経緯を探りました。その過程で、秋田県の稲作事情や稲育種の今後の課題等についても調べました。
活動のプロセス	分科会における活動のプロセスを、項目を追って段階的に述べていきます。最初に、「ゆめおばこ」についての調査を始める前に、わが国における稲の育種の歴史とその社会的な背景を学び、それを踏まえて、秋田県の稲作事情と新品種「ゆめおばこ」について調査を行いました。 項目を順に述べれば、1)日本における近代育種が明治時代に始まり、大正・昭和にいたる間の歩みを著名品種で辿り、2)育種目標の変遷を育種技術の進歩から見ていくこと、 3)昔の品種（多収性品種）と今の品種（良食味品種）の違いから米についての社会的ニーズの変化を理解すること、そして、4)秋田の稲作事情の変化と「あきたこまち」の誕生に触れ、最後に、5)「あきたこまち」との差別化を目指す「ゆめおばこ」の育成がなぜ必要になり、この品種がどのようにして生まれたのか、という流れで研究しました。
ま と め	「ゆめおばこ」の育成は、秋田県の気候や風土に適した早生～晩生までの良食味品種のラインナップ確立の一環として、早生の「あきたこまち」に続く中生の品種として作られたものであること、さらに今後は、晩生の良食味品種の育成が課題であることを学びました。 また、秋田県では現在、「あきたこまち」や「ゆめおばこ」のような「おいしいお米」の育成だけでなく、他用途米や飼料米としての「超多収品種」の育成も進められていることなどについて理解を深めることができました。

3-10 第 10 分科会「知恵の輪（チャイニーズリングを生かした授業作り）」

担当 杜 威

分科会テーマ	知恵の輪（チャイニーズリングを生かした授業作り）
担当者・メンバー	担当者　杜　威 メンバー（１０名）　米　大次郎　泉谷　優里　加藤　史弥 後藤　奈緒人　佐藤　彩香　佐藤　剛史 布谷　渉　吉國　太貴　椎谷　浩子 松崎　加奈
活動の概要	知恵の輪の一つチャイニーズリングについてのしくみ、歴史を理解し、小学校、中学校、高校の算数、数学の授業で教材として役立てることができるのか研究しました。
活動のプロセス	私たちの分科会では知恵の輪の一種、「チャイニーズリング」について扱いました。平成２３年からの新学習指導要領から算数数学科で「数学的活動」を取り入れるようになりました。そのため私たちはこのチャイニーズリングを使い、小学校、中学校、高校の算数、数学の授業でチャイニーズリングを教材として扱えないか研究しました。 分科会では、チャイニーズリングの操作の練習。各自テーマを決めてチャイニーズリングについて調べレポートとして発表。一人一人チャイニーズリングの作成。また巨大なチャイニーズリングも作成しました。そして３グループにわかれそれぞれ小学校、中学校、高校のチャイニーズリングを教材として生かす授業作りをしました。各グループによる授業作りでは小学校ではチャイニーズリングとふれあうことを。中学校では２進数から１０進数への変換のしかた。高校では数列への応用というように各グループで授業作りをしました。
まとめ	チャイニーズリングを授業に取り入れていくことで例えば高校数学の数列のように生徒にとって理解しづらい内容にも、授業に取り組みやすくなると考える。数学的活動が大切になっていく中でチャイニーズリングなど数学と関係のある教材を開発していくことが重要であると考えました。

3-11　第11分科会「色や形で伝えよう―絵本づくりで―」まとめ

担当　長瀬達也

分科会名	色や形で伝えようー絵本づくりでー
担当者・メンバー	担当者：長瀬達也（美術教育講座） メンバー(17名)：保苅萌美，奥崎亜実，齋藤望穂子，柴田明子，鈴木翔子，坂陽子，山谷紋央，岡田暁，木村景，寺松諒子，藤澤知里，門間美保，渡邊かんな，伊藤麗華，下田展子，中野英梨佳，羽田麻里子
活動の概要	社会や学校では，言葉が重要な位置を占めています。しかし，人間にとっては色や形も，思考や伝達などの重要な道具です。ここでは，自分の伝えたいことや，表現したいことを，言葉を使わないで，色や形だけを使った絵本をつくることで，色や形，画像や映像の力について考えていくことにしました。 具体的な活動としては，まず色や形による初歩的な表現をやってみたり，「はらぺこあおむし」などを創ったエリック・カールの色や形の表現の哲学や方法論を調査したりしました。これらの成果を生かして，色や形だけを使った絵本をつくっていきました。
活動のプロセスやまとめなど	活動を終えて　　メンバー代表：奥崎亜実・鈴木翔子 絵本は，絵と文字を使って物語を伝えることが多いものです。 今回私たちは，あえて言葉を使わずに，色や形だけで表現するという方法をとりました。このことは思いのほか難しく，自分が伝えたいことをうまく表現できなかったり，なかなかテーマが見つからなかったりと，かなり苦戦しました。 しかし，言葉が使えないからこそ，色や形などの造形要素に，あらためて着目するようになりました。初めて使う画材も多く，思い通りにいかずに迷ったりもしましたが，予期せぬ色や形になり，逆にそれが良い効果を出すものになりました。 このようにして，言葉ではなく，色や形でしか表現できないことで，イメージを伝えられるように工夫しました。その結果，様々な表現が生まれ，十人十色の絵本を作ることができました。 言葉がないことで，その絵本のとらえ方は読み手によって異なったものになります。しかし，それが逆に面白く，伝えること，表現することの楽しさを感じることができました。そして，言葉の的確さや効率の良さなども，再認識することができました。
	活動から見えたこと　　担当者：長瀬達也 メンバーの意欲と努力が，色と形だけで，素晴らしい絵本を創り出しました。今の学生たちや，子どもたちは，私たちの世代より，ビジュアル的な能力が高いのではないでしょうか。このような能力，そして意欲を，教育現場の総合的な学習で，前例にとらわれず探究で発揮させていくことが大切に思えます。

3-12　第 12 分科会「秋田の風土と文化を考える（方言・文学・民俗）」まとめ

担当　成田雅樹

分科会テーマ	秋田の風土と文化を考える（方言・文学・民俗）
担当者・メンバー	担当者　成田雅樹 メンバー(２０名) Ａグループ…面川拓巳、木元志帆子、小松貴大、高橋貴之、富樫菜子 Ｂグループ…丹博子、早津みなみ、島田真紀子 Ｃグループ…大友江梨子、渡部あすか Ｄグループ…高橋さやか、濱道彩加、保坂小春、本橋沙織、吉田安希 Ｅグループ…松田洋 Ｆグループ…伊藤真人 Ｇグループ…泉学、袴田健太 Ｈグループ…石井大資
活動の概要	グループごとにテーマを設定し、文献調査、インタビュー等の方法で調査活動をし、結果を絵本、カルタ、動画、スライド、印刷資料等にまとめた。今回はすべてのグループ・個人が方言を中心テーマにして活動した。
活動のプロセス	分科会のはじめ２回は、担当者から過去の受講生の活動成果（方言新聞、方言絵本、方言ＣＭ、方言劇、アニメ方言吹き替え、映画方言吹き替え、方言テキスト、方言県内観光案内パンフ等）の紹介があった。 その後は、各グループ・個人ごとに調査活動を始めた。その際、参考にするため、担当者が方言教育・方言研究・方言関係一般書・方言カルタ等の資料を毎回提示した。

また、活動中は担当者が方言関係の情報（ＮＨＫの方言関係のシリー

ズ番組、方言辞典のパソコン用ソフトウェア）をスクリーンで提示した。

グループ・個人の活動は、必要に応じて分科会の教室以外で行ったが、毎回必ず教室にもどって授業を終了するようにした。

調査とまとめは年内に行い、年明け１月２０日の分科会で各グループ・個人の成果発表会を行い、全体発表の担当グループ・個人を決定した。

3-13 第 13 分科「日本の水輸入を考える」まとめ

担当 林武司

分科会テーマ	日本の水輸入を考える
担当者・メンバー	担当者:林　武司 メンバー:片岡舞子、廣田雅俊、菊池奏江、熊谷　衛
活動の概要	日本が輸入（消費）している海外の水資源量を理解するため、各自が調査した品目（牛肉、小麦、リンゴ、コメ）について、各国の Water Footprint（生産するのに消費した水の量）を整理・集計した。その結果を地図として可視化するとともに、日本の Water Footprint と比較することで、日本の海外の水資源量への依存度を調査した。
活動のプロセス	はじめに、世界の水資源の需要の現状と、日本に輸入されている物資の生産に伴う水の消費量について整理した。その結果を踏まえて、本分科会のテーマを「日本は、どれくらい海外の水資源に依存しているのか」と設定した。これによって、水を介して世界の資源や社会・経済と日本の関わりを理解することを目指し、日本で作ったほうが水を節約できるものは何だろうか、ということを考えることにした。 まず、国家間の水資源のやりとりを議論するための概念である“Water Footprint”について理解するため、Water Footprint Network が発行している Water Footprint Manual（英文）をメンバー全員で講読した。講読に際しては、各自が和訳・要約したものを全員で確認しあうことで、知識の共有化をはかった。 Water Footprint の概念や算出方法などを理解した後に、各自が関心のある輸入品目について調査することとした。作業手順としては、輸入品目に関する各国の Water Footprint のデータを集め、その結果を地図に表して可視化するとともに世界の Water Footprint を算出する、とした。 今回の調査では、牛肉、小麦、リンゴ、コメという 4 品目について調査を行った。これらの項目にした理由は、日本に輸入されている主要な食品類である穀物、肉類、野菜・果実類について調査することで、おおよその全体像を把握するためである。穀物からは、自給が主であるコメと、輸入が主となっている小麦を選定した。肉類からは、消費量が急速に増加している牛肉を対象とした。野菜・果実類からは、東北地方の代表的な生産物の 1 つであるリンゴを選定した。 各品目について検討する際には、日本への輸入の状況や国内自給率、各国の生産量、栽培に適した気候なども考慮した。

まとめ	今回調査した品目については、日本で作ったほうが水の節約になることが確認できた。このことから、世界規模での水資源の保全という観点からは、これらの品目については、自国での生産を進めていくべきであるといえる。ただし、自国での生産を進めるためには、関税や貿易協定，生産コスト、単収、飼料など様々な課題の解決が必要であるということがわかった。 また、当たり前のことかもしれないが、農作物や畜産物などの生産は、それらに適した気候の土地で行うべきではないかということも、改めて確認することができた。 今回の作業を通じて得られた結論としては、地球規模での水資源の節約を意識しながら、自国での生産量を増やすなど海外の水資源になるべく頼らないような方法を模索していかなければならない、ということである。

3-14 第 14 分科会「シティズンシップ教育と秋大生の活動と評価」まとめ

担当 望月一枝

分科会テーマ	シティズンシップ教育と秋大生の活動と評価
担当者・メンバー	担当者　望月一枝 メンバー(４名) 板倉稜、笹原美以子、関駿介、佐藤洸寿
活動の概要	シティズンシップ教育について理解をするため、日本ではどのような活動が行われているのかを調べた。私たちの身近にあるシティズンシップ教育と考えられている活動を挙げ訪問調査した。活動を通してシティズンシップを身につけているかに着目しインタビューとアンケートを行った。
活動のプロセス	シティズンシップとは「多様な価値観や文化で構成させる社会において、個人が自己を守り、自己実現を図るとともに、よりよい社会の実現に寄与するという目的のために、社会の意思決定や運営の過程において、個人としての権利と義務を行使し、多様な関係者と積極的（アクティブに）関わろうとする資質」（経済産業省『シティズンシップ教育宣言』2006 年）ということである。そもそも自分達がそのような言葉を知らずそれについて理解すべく、最初の分科会で得たシティズンシップ概要を元に、各自が私たちの周りでどのような活動が行われているのかを調べ共有することにした。その中では日本国内の小中高特別支援で行われているシティズンシップ教育や秋大生やほかの大学が協力して行っている活動、地域の活性化を目的とした活動などがあった。これらを共有したうえで、自分達の身近なところでシティズンシップ教育が行われてないかと考え、秋大生について取り上げ調査することにした。 取材はインタビューと私達が作成した自己評価アンケートを軸に行った。 1.大学の講義：ジェンダー論の講義 →実際に講義に出向き、調査 2.生協の活動 →生協の櫻田専務にインタビューを行い、生協や学生組織の取り組みについて伺った 3.サークル：ボランティアサークル V-net →ボランティアサークル V-net にインタビューとアンケートを行い、活動内容と活動についての意識調査を行った 4.学部学科の取り組み：地域科学課程生活者科学選修 →生活者科学選修の食生活研究ゼミの取り組みである秋田大学オフィシャルいぶりがっこ製造プロジェクトについて訪問取材をし、インタビューと活動についての意識調査を行った

	5.海外に向けた活動：秋田キャンパスネット 秋田大学や国際教養大学など大学の枠を超えて国際協力や地域貢献を行うキャンパスネットのミーティングに出向いて取材と意識調査を行った。 これらを PP にまとめて全体会で発表することにした。
まとめ	内閣府が昨年 7 月にまとめた『子ども・若者ビジョン』の中で、シティズンシップ教育の推進が施策の基本的方向として掲げられた。経済産業省が人材育成策の面からシティズンシップ教育宣言を行ったのが 2006 年である。その研究会の委員を務めてきたがそのころから状況が変わった。しかしシティズンシップ、という言葉自体、それほど耳慣れない言葉であり、それを意識しながら生活をしている人はまずいないはずだ。私たちが身近なところで実践されている活動を調査した結果、それらをちゃんと意識した上での活動は社会にとっても重要な意味を持つことがわかった。シティズンシップという視点を掛けたうえで秋大生の活動を見ていると少なからず秋大生はシティズンシップを身につけているように見える。海外においてのシティズンシップ教育は進んでおり、日本にも最近になって導入されるようになりその存在に目を向けられるようになった。これからの学校教育においても無視できない存在になるがそれを実践に移す上での基礎資本となった。

3-15 第 15 分科会「小学校外国語活動教材開発」まとめ

担当 若有保彦

分科会テーマ	小学校外国語活動教材開発
担当者・メンバー	担当者　若有保彦 メンバー(13 名) 安達勝裕、伊藤果歩、菅野綾、木元博之、柴田英亮、柴田良隆、高橋裕子、中林侑大、樋渡実由梨、堀井和洋、松川若菜、松山雅一、岡田麻美
活動の概要	本グループでは小学校外国語活動で使用する教材の開発に役立つ情報を収集し、分析、考察を行った。具体的には、(1)日本と諸外国の教育制度の比較、(2)日本と諸外国の教材の比較、(3)小学校外国語活動の実際、の 3 つのテーマについて、小グループに分かれて研究を進めてきた。
活動のプロセス	「日本と諸外国の教育制度の比較」をテーマにした小グループでは、他国がどのような英語教育を行っているのかについて、日本と比較しながら調査した。調査対象として、アジアの国である中国、韓国、それに加えヨーロッパの国であるフランスを取り上げた。調査項目としては各国の小学校の外国語活動の開始年度、及び教育目標と授業時数を取り上げた。 「日本と諸外国の教材の比較」をテーマにした小グループでは、各国の英語力の差は教育的な立場から見てどの段階から発生するのか探るため、小学校の教科書を比較した。比較する国は、日本とは違い、母国語が英語に近いフランス、母国語が日本語に近いにも関わらず TOEIC などの様々な英語のテストの成績が日本よりも高い韓国を選んだ。教科書比較の観点として単語数、教科書のスタイル及びねらいを選んだ。 「小学校外国語活動の実際」をテーマにした小グループでは、秋田市の小学校に訪問し、外国語活動の実態について調査した。授業への児童の参加の様子や、教師の指導の手立てなどの観点から参観した。同時に教師と児童に外国語活動に関するアンケート調査を依頼し、教師が直面している問題や指導にあたる際の工夫や留意点、また児童に、英語に対する関心や意欲、中学の英語の授業への期待について回答していただいた。その結果と参観内容をもとに、外国語活動の実態に関してまとめ考察した。
まとめ	活動全体を通して学んだことは、外国語教育はその国の現状によって、扱う言語や教育目標が異なり、よって教科書で扱う内容に差が生じ、語学検定に能力差が生まれるということだった。また日本に関しては、実際の授業を行うにあたり、教師が抱える課題が多くなるということがわ

	かった。 　英語教育制度の比較から、他の国が中学年くらいから開始しているのに対し、日本の外国語活動の開始学年は遅く、五年生からということ、また内容や時数も他国と比べ少ないことを知った。教科書の比較からは、調べていく過程でそれぞれの教科書の単語数やスタイル、ねらいなどに様々な違いが見られることがわかった。特に単語数は日本が 65、韓国が 241、フランスが 1190 と大きな差が見られた。また、フランスは文章の量が圧倒的に多く、ゲームのような活動が少ない作りになっていた。調査の結果、日本の教科書は楽しむことに重点がおかれているが、もう少し実践性を高めることが出来たならば理想的な教科書になると感じた。